

# フランス音楽家

「世界歌謡祭」（ヤマハ音楽振興会主催）が始まったのは1970年。僕は第1〜3回に音楽プロデューサーとして参加した。71年の第2回で

## 私の履歴書

久 克 部 服

㊦

ネジャーから「どんなバンドだ。演奏は大丈夫だろうな」と楽屋で詰め寄られているところにルグランも現れた。

「君、フランス語を話すのか」とルグラン。「パリ国立高等音楽院で勉強しました」と答えたら「本当か」と表情が一変した。「なんだって、シャランに習っただど。おまえもあの鬼先生の生徒か。あ

### ルグラン氏、同門だった

ポール・モーリア氏とTV共演

服部良一の息子と話が合わないわけがなかった。フランスの自宅にも招いてくれた。

「ゴッドファーザー」や「太陽がいっぱい」など多くの映画音楽を手がけたニーノ・ロータが来日したとき、ルグランと一緒に東京公演を見に行った。70年代後半のことだ。終演後、3人で連れ立って原宿でしゃぶしゃぶを食べた。

あ、こいつは愉快だ」。ルグランもアンリ・シャラン先生の門下で、僕の3年ほど先輩だった。日本のパンカラ学校

ルグランは兄のような年だが、ロータは父親ぐらいの年齢で、イタリアのバリー音楽院で学長を務めていた。今度パリに来る機会があったら、一緒にロータを訪ねてバリー

はゲストを招く「ショータム」の音楽監督も務めた。ショータムはミシエル・ルグラン。「シエルブルーの雨傘」をはじめ、数々の映画音楽を手がけたフランスの大物作曲家だ。彼が日本のビッグバンドを指揮するという企画だった。彼の気難しいマ

で校歌を歌い出すのだろう。以来、来日するたびに「カツ、僕だよ」と電話をかけてくれるようになった。同門の先輩、後輩でもあるし、彼の父親もレイモン・ルグランという指揮者兼作曲家だから、しかし、肝心のロータが79年

に亡くなってしまった。ほかに多くのフランスの音楽家と知り合った。イーリスニングと呼ばれる分野の大家はほとんど友人といっ

の趣向で共演する機会があった。さらに親密になった。モーリアやルフェーブルと並び称されるカラベリとも仲がいい。彼の「グラランド・オーケストラ」は弦楽器の美しさに定評がある。自分のラジオ番組に彼を招き、僕の音楽を聴かせたことがある。



筆者が指揮をするレコーディング

が、途中から弦楽器が入ってくる。そこでカラベリの表情がパツと明るくなった。「いいね。やるじゃないか」と目顔で合図された。同業者に認められるうれしさは格別のものがある。

「恋はみずいろ」「オリイ」の首飾り」などで知られるモーリアはまじめな人で、譜面にも几帳面さが表れている。NHKのテレビ番組で「ポール・モーリア対服部克久」

国内だけで通用するガラパゴス的な音楽ではなく、国際的に違和感なく聴かれるのが僕の目標だ。ルグランやモーリアをはじめインターナショナルなフランスの音楽家は、いつも僕の羅針盤になってくれた。（作曲・編曲家）